へ13
3223
31

天保戊戌新彫

大和巻

残編

邯鄲諸國物語五編

種彦作

國貞画

榮久堂梓

歌川國貞画 播磨の巻 附り 山市屋板

并二巻 奴二巻 振出 と云方る丹前風呂の今様姿

邯鄲諸國物語

丁度二人良女氣質氏 奉仕の玉男奉の

小菊ゲ衣裳其積ゲ四郎ゆるゝひる註文同錦左の

天保
庚子春
發行
歌川國貞畫
種彦諸國物語
播磨の巻
前編上
一
種彦諸國物語
播磨の巻
前編上
春蝶樓画
榮人文庫

邯鄲諸國物語

大和の巻

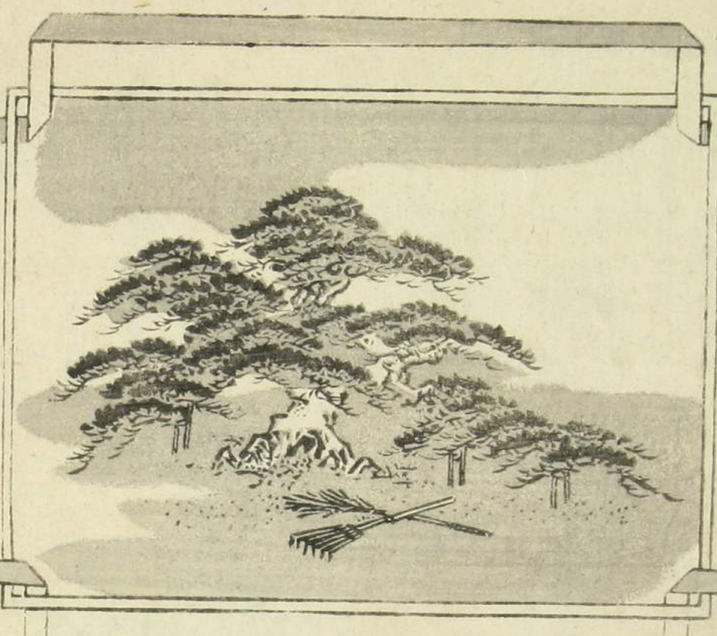
残編

上冊

天保戊戌孟春發行

柳亭種彦作　歌川國貞画

芳町親仁橋角榮久堂山本平吉上梓



柳亭種彦作

歌川國貞画

邯鄲諸國物語

たりまの巻

前角ん下

榮久堂上梓

種彦諸國物語

香蝶樓画

榮久文庫

大和の巻 残編上

種彦諸國物語

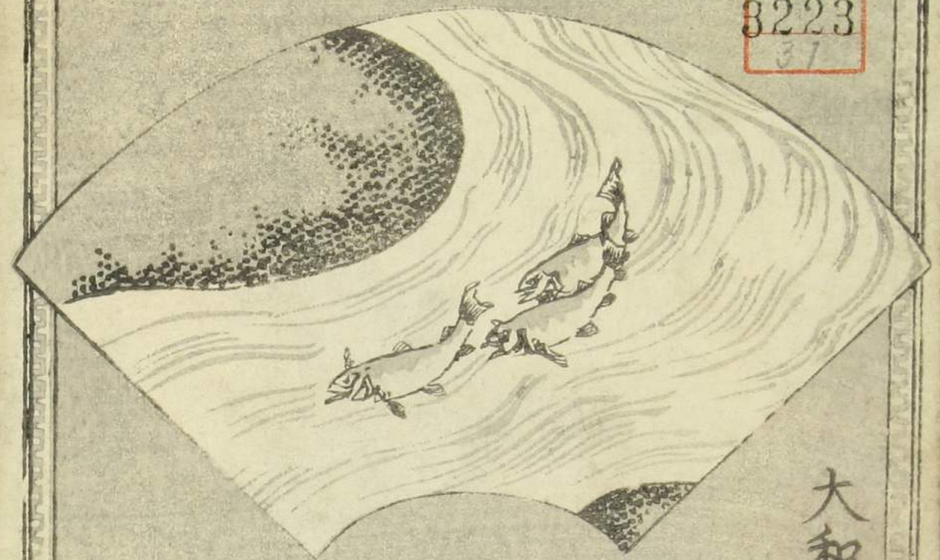
天保九年 戊戌夏春

歌川國貞画

榮久文庫

大和の巻 残編

特
へ13
3223
37



大和の巻　殘編　下

耶鄲諸國物語

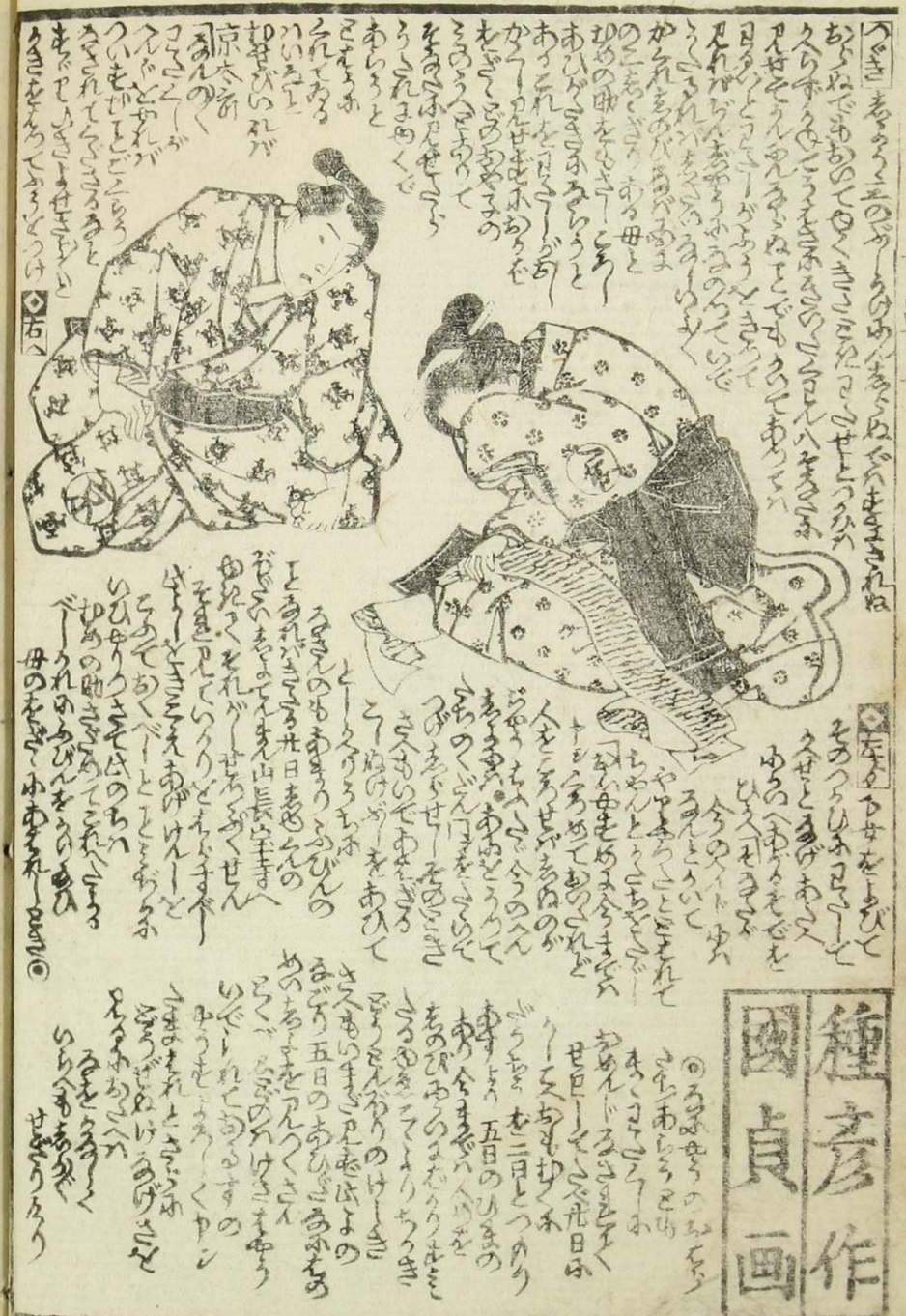
種彦作

國貞画

榮久堂板

大和
やまと
やぐるま
圖

高市の城下ふりそで踊子の指南も



種彦作
國貞画

榮久堂刊行藏板略目

永花百人一首文字抄

首書 世話字尽の百人一首ともいふべき書にて古歌おのおの一句づつ安き世話字にて解し

繪抄 ちゆくとしたとく志ゝ其ゝ国ゝ恋ゝ

源氏五十四帖

格彩色 小錦絵

右ハ源氏物語五十四帖の神髄を絵ものがたりとなし彩色を附し光格彩色ふるのしられば世界物語なるべし

御誂染逢山鹿子

六編揃

此さくしハ坂人形座の種彦作にて作者の名ハ世界に名高く

縁結妹脊双六

さくら川 玉国

この十ごろの世の女郎の心合を絵にしたるものにて

但本十四枚揃 たゝみ入 はり入

東都錦繪所 江戸よこ町 橋角 山本平吉梓

甲冑五

甲冑六
五

邯鄲諸國物語

初編追求 柳亭種彦作
九編十編新刻 一陽齋豊國画

菊壽童霞の盃

山東庵京山作
十編 新刻
一陽齋豊國画

朧月猫の子

山東庵京山作
六編 七編
一勇齋國芳画

雲の友の竹紙

山東庵京山作
初編二編 新刻
一陽齋豊國画

仙女香七變化粧

十返舎後一九作
二編
一陽齋豊國画

竹女一代記

玉蘭齋作
四編
哥川貞秀画

隅田川月姿見

式亭小三馬作
三編
一陽齋豊國画

美艶仙女香 一包四十銭 京橋南伝馬町二丁目 坂本氏製
黒油美玄香

榮久堂 江戸芳町親仁橋角 山本平吉版

我子よ我身を賣る寶娘
誘ひ出チリホウ浄土へ送りて苦海の
勤め客と合せる湖子紙載へえより濁れ
音ふいつくさ室の津の遊女
命をすつと投出さ忠義娘
父が為換の和泉さるごさよハッチリ覺させさ
主人の眼茶扱所の曲を拔たあるかす
せいい清さ二の間扶沈黄
兄の那道ふ楽らざる自節娘
蒲公英孫のポンと違ふさ乳母が仲人の彩
所名を反変る君の恵よえの鞘よ紛りてうえ
ましさ高砂の千鳥茶
天保ふの春

種彦

播州室の津
空蟬屋の遊君
芸妓菊
禿とまるもり

浮嶋の扈從
篠野權三

室の津の阿曽比
奴三笠後ふ逸之進の後妻　阿佐家

浮島の家長
浅香逸之進
宗味

播州赤穂郡白旗山の麓に古城跡今なほ存す往昔浮嶋大江之介師春と云者當地に住し其の國半ばを司どる此浮嶋の家につき一條の話插あり

第一のおとなを
家臣 岩木源次びやう系只平
第二を
青柳帯たち 原記
第三を
浅香徒々 進宗味

「つゞき」たくさん
ゐらふてかくゐる
今ごろハ人くは
ゆきひらさまで
ひざらうと
今までびん三
ちん平とあひ
てふなーして
ふうくいのまぬ
さけかまへ
され
あさともれ
いふとこあの
あらざれたは
たちめかどさて
「ろふうぐぐくくぶくと
あゝごあやきげんかける
そんあらよいで久うハいさ
さぬさまれがその白ちうぢ
これさハごふござやうせきが
つのつてもあんくとんそわら
ゐるそれで八年ごろハできぶ
めされさろく此まハ人とあゐる
のつまきをかせかーやもぶーのそく
かうろくとてうごいまゐそれがけの
ごやらこうひかやでんいくさいまるし
あんめふうけんとみそるらし「小ぎく
とよぶこ家ま十六七のいろよき女
ゐるめごようとさちいづる「中右へ」

「中の」「あゝせぶちやめのゝむ
ゐきれろうくまぞとござきよう
琴もまひもおぶどきよう
これをそのへさーおかきうまま
ゐるのくんげんよりかんさかさきうが
そのふる絵もやくとまめて
なぜあおんのさちのけいにざをそ
かんまへいざるふいでまらん三をも
ぞうぞうはさーしてまかりゐがごき
けんへるぞちうとさその咄まあいで
おきこまらじさあの山家へ
げーびやう家のくれ
を姪よりーもある
日どどろさてこうのさまでござき
けんをそへてハいろくいさでぎきの
これを是もよんででんことミ人つ
今までさけをさべてやうさや
いまよりこぜんはおかり小きくま
まかせこぜんこかつきをあいち
平せやあかれさんをのあて
ごりそうてもうござりかけいよ
ようせへとやへんのだんだん
ゆひさーのでーさてくあ
のゝせいぶさようれどござき
きよう春のまれつき
げなそうさせていいいさく
あれ沼沼ぬまきとの
よいのふぞをものそ
あれど「三の巻へ」

「一の巻より」どーいとふいきぞまそども
四五年たつとさろのふあるさてが
とーがふけうとさろ人を守きを
ひきちへようえきーおぐるで
でざらうとござそでもつくね
あのさぬのさいをうわきれ
まそいとまも「二ッをきさーし
きとけさてう、ふの向く
くとそのゝの志んへ
えりもせぞそのそ
やるるいあやうと
小きくはふきも
くゐてが
やくざうり
よそそいいせ
びんこちん平ひきられて
やうく、へこそそい
さをのそけれ
○はあさからいつのおん
をどめの名い
いかざちうとぞ
よびける

「狛ぐそり娘のおくり」
かれがいらききまま嫁ふ
つくぐそるたんどめとめのえん
今より二十年だろいせん
たんだのはひのぞくとかり
甲斐の都うゆれ沼瓶せん
政う次郎もかどとひやのめ

「ぎ兎くいを
ずんだそてきぐさこのよう
ぐおたてとあいじこのあり
これらき路のれうちだん
あうのさうひゆてあのれが
おーかぐおくあそせどうけ
大江の助の父うき来またあ
うつてとーやかーこふおむきてく
せめておきになるやひあう
ぞえ一ぶたあるとのやぞせぞ
あうのまうもどうちかとをからせ
なきうれまのおうとまちろ
ちん志よちうくと「四中へ」

「四右より」二人うちられるのゝあり旅まえりのゝの
やをさぐゐてあふのあろうとさとーかかくの
二人のんぞえふ「あうよりいでーとう人にあうぞふの
ぞくやぞーひと息身にたいせざいあいざ大まぞう
ぐんれあんめるえひそんの孫ぐへそまつると△

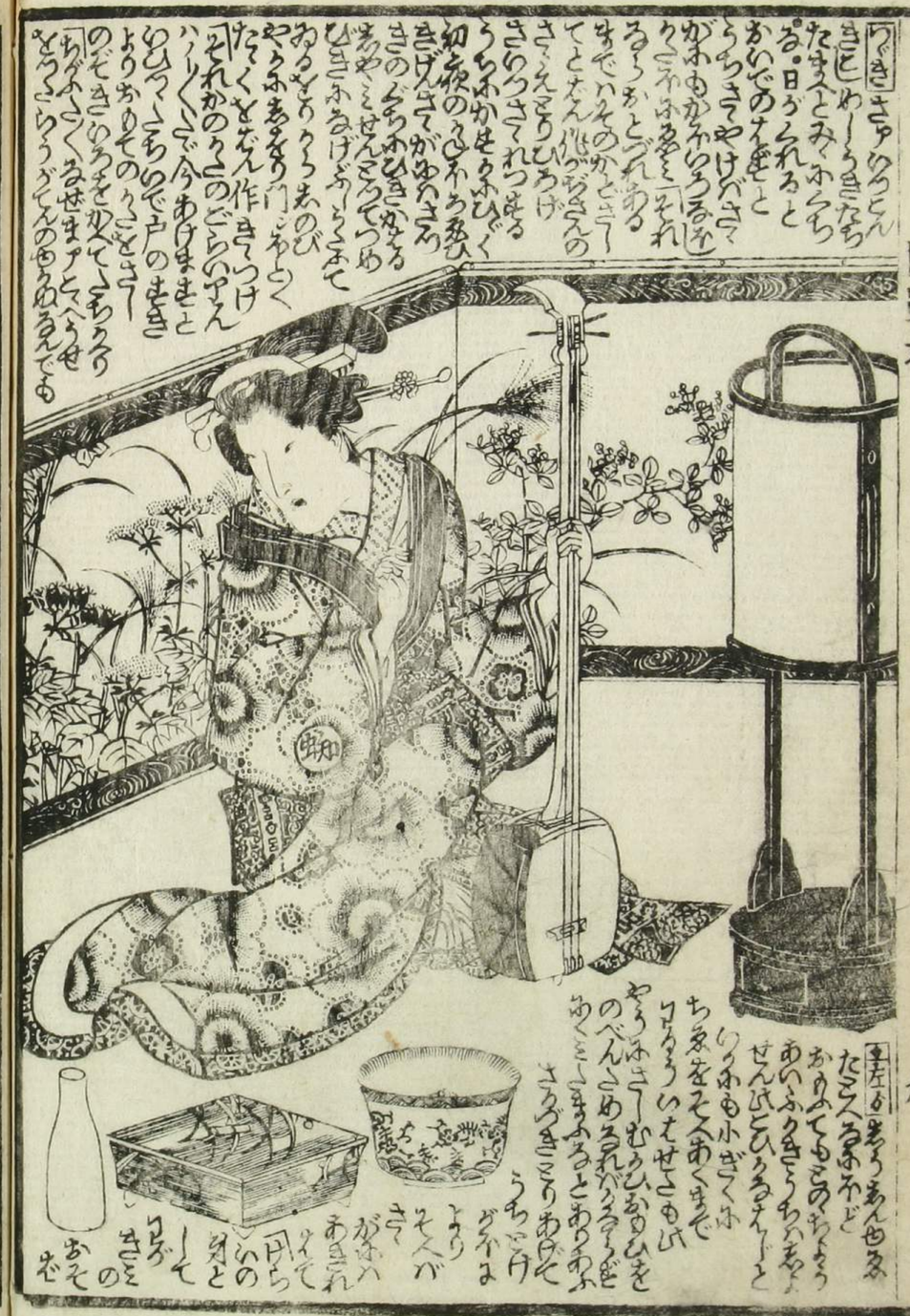
△つまんでとどのべふけれ
此ときふたちゆる
ずぞだーんおのえを
せんそでうさまてふ
まぎれわさ河しろべから
次ゆてつくへとの
ののそうちやみふ
一人二八そうがきを
ゆきのぞくふ吉
みどこうのかで
とー老人
ありー人ごい
女がとうさ
が金ぞりり
あてやう

あゝのお年きう
ようおんまべさ
ののるりれが
まやうぎの
わと八かく
よびめくう
おきとれそれ
がーありるふ
ごうんや

せときのて老人ゆに
ひれおーうのせう年
ざーあて国れいきこぞ ひとりの
まで父のあく母もるとぐ「つぎき」

江

江



種彦作 國貞画

榮久堂刊行藏板略目

永花百人一首文字抄

首書繪抄

源氏五十四帖　枠彩色小彩絵

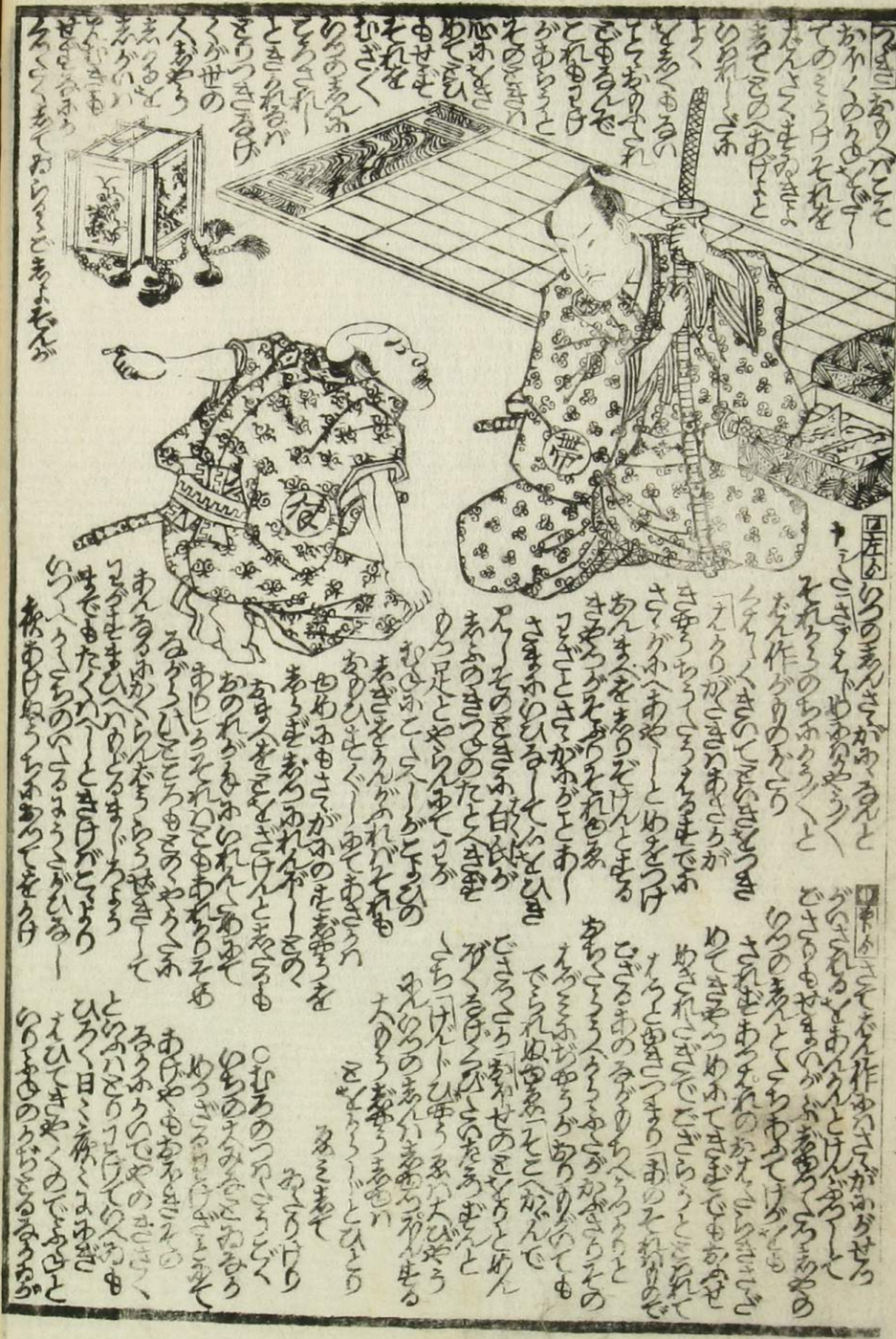
御誂染逢山鹿子　六編揃

縁結妹脊双六

但五十四枚揃　たゝ入　はゝ入

東都錦繪所　江戸よし町やぢ橋角　山本平吉梓

三



碇石村

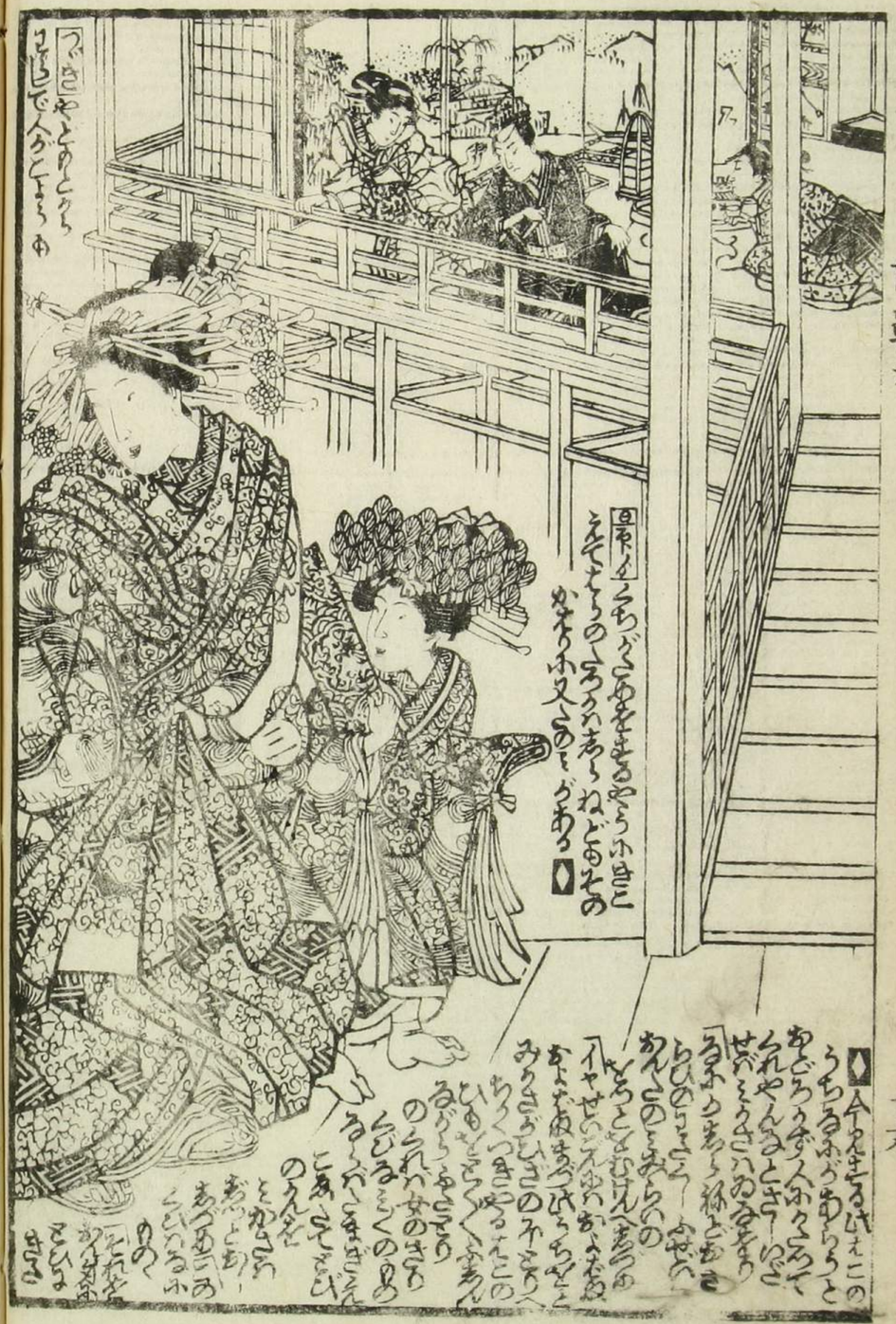
左ゑんの

東 稲富村
西 伊津村

あり

子どもらいそりやくの
人ぐとあこがれのうちの
のそいてそそくさ
とびあつさが
そののちハ
ゐぞええぬ
りとおもて
わくおれ〳〵
きのうせえん
あるうりんして
ひとえんでも
ともてゑえもし〳〵と男
ぎのうつせこやゆ
ちしてようきたし
かのむすめがのもこの
こそろのこちきいめて
あそ十ロよろあつて
かあびそう人こいろあつ
初七月がまむとそのまくうつ
せこやへむすめいきておろげ
十ふがふくまろのませなろも
きんくたてるつりでうひもに
これいめろのりまはえとかの
あのあまりそのくらろ
そのたろハきてませぬが
あきまおあ
ゑやろをさせ
まろ〜

入船帳
金銀出入帳



國貞画 種彦作

美艶仙女香
御墨油美玄香
右ハ黒油ニ而精製
仕候

清書
谷金川

邯鄲諸國物語

初編より八編迄出来 柳亭種彦作
九編十編新刻 一陽齋豊國画

菊壽童霞の盃 山東庵京山作 十編 新刻 一陽齋豊國画

仙女香七變化粧 十返舎後一九作 二編 一陽齋豊國画

朧月猫のさうし 山東庵京山作 六編 七編 一勇齋國芳画

竹女一代記 五蘭齋作 四編 哥川貞秀画

春の梅の竹紙 山東庵京山作 初編二編 新刻 一陽齋豊國画

隅田川月姿見 式亭小三馬作 三編 一陽齋豊國画

美艶仙女香 一包四十銭 茶店名 東橋通伊勢屋町二丁目 坂本氏製表

黒油美玄香

榮久堂 江戸芳町親仁横角 山本平吉版

種彦作
國貞画

邯鄲諸國
物語 播磨卷前編

天保庚子春新彫

榮久堂製本